

## マンガに描かれる女性の体形と日本人若年女性のボディイメージ Sociocultural effects of Japanese comics (Manga) on body image of young women in Japan

横山 伸<sup>1,2</sup>、井上 梓<sup>2</sup>、北澤沙池加<sup>2</sup>、村上奈月<sup>2</sup>、長澤祐美<sup>2</sup>、長瀬 緑<sup>2</sup>  
西綾子<sup>2</sup>、高橋あつ子<sup>2</sup>、内山ちえみ<sup>2</sup>、上野順子<sup>2</sup>、山本詠子<sup>2</sup>、杉山英子<sup>2</sup>

### 抄 録

日本のマンガの持つ内容の広さ、豊かさ、洗練性および画像表現の自由度は、読む者のボディイメージに強い影響を与える可能性がある。マンガにおける若年女性の体形の描かれ方に関して、ジャンル別（男性向け—女性向け、成人向け—子供向け）の体形の特徴、物語上の役割や人物の性格が体形に及ぼす影響、作者の性別と作品のジャンルの関係について検討した。描かれた身体像は、現代日本の若年女性の標準体形と比較して、若年女子短期大学生らの視点から評価した。男性向けのマンガではやや細いウェストと大きなヒップを持った若年女性が描かれているのに対して、女性向けのマンガではウェスト・ヒップ共に細い若年女性が描かれていた。作品中の若年女性の役割や性格と体形の関係では、女性誌において女性性や母性がいずれも細い身体像と結びつき、また依存性が太いウェストと結びついていた。男性向けのマンガを男性が画いている一方、女性向けのマンガは女性が画いていた。これらの結果から、マンガにおいては非現実的な「やせ理想像」が、女性読者を対象として、女性マンガ家により作られていることが示された。

### はじめに

経済発展や大量消費、やせ理想像等の社会文化的要因は、摂食障害の発症 (Slade, 1973; Bruch, 1979; Prince, 1985) あるいは摂食障害に繋がりを得る食行動異常 (Lee, 1999; Powell, 1999) に関わる要因として重視されている。摂食障害に関わるこれらの社会文化的要因を一括りに"文化の欧米化" (Wiseman, 1992; Hess-Biber, 1997; Sypeck, 2004) と呼ぶのは容易であろう。だが既に、摂食障害が欧米のみならず世界中で報告される (Gordon, 2001) ようになっている現在、我々にとってこの観点は、非欧米人である我々にとっても既に日常のものとなっている現代文化に対して、避けることが不可能であることを否認しつつ、批判的なスタイルで懐古趣味に逃避するものである。それでは、摂食障害の理解や治療、予防活動に対して、有用なものとなり得ない。ところで摂食障害が強く社会文化的影響を受ける疾患であるとすれば、世界各地の個々の文化や価値観も、この疾患に対して何らかの影響を持ち得るであろう。しかしながら、このような観点から、摂食障害あるいは関連する食や体形に関する誤った認知に対して、非欧米文化の産物や観点がどのような影響を及ぼすか観察した研究は、これまで

のところほとんど存在しない。

日本のマンガ (コミック) は、その内包する世界の描写の豊かさ、網羅する領域の広さ、画像や物語の洗練性において、欧米の cartoon や comic strip とは異なるものである (夏目, 1997; Gravett, 2004)。日本のマンガは、手塚やさいとうら斬新な技法や感覚を導入したマンガ家らにより、20世紀中頃からそれまでの戯画や風刺画、cartoon や comic strip とは異なるものに発展した (呉, 1986)。当初は子供向けの読み物としての位置づけではあったが、その画面構成や物語は映画や小説に匹敵するものとなり、やがて1960年代には思春期後期から成人の読者を対象とした内容の作品 (性的なものとは限らない) も次々と登場した (夏目, 1997)。これらの作品の幾つかは、テレビアニメーションとして作り直されたものが翻訳され輸出されたことにより、1980年代以降は世界中に広まった。子供向き/成人向きといったジャンル別による規制の問題や、映像表現の規制に伴う内容の改変のため、当初は酷評されたものもあったが (竹内, 1995; 夏目, 2000)、それらテレビアニメーション作品の芸術性や内容の豊かさが浸透するにつれて、20世紀末には書籍の形のマンガも、東アジアのみならず欧米でも広く認められるようになった (夏目, 2000; Gravett, 2004)。

マンガは、他のメディアと比較すると、読者のやせ理想像に対して、以下の二点においてより強い影

1 信州大学医学部精神医学教室

2 長野県短期大学生生活科学科健康栄養専攻

響を与え得る。一つは、マンガの描く内容が、細部に至るまで丁寧に構成された、もう一つの現実世界となっているため、読者はその世界を容易に自らの内に取り込むことができ、また自らの願望を容易にその世界に投影できることである(香山,1991)。もう一つは、テレビドラマや映画、写真を用いた広告といったメディアの映像が、実在する俳優やモデルの姿を用いるのに比べて、マンガは絵であるため、そこに描かれる人物の姿は如何様にも変形あるいは誇張され得ることである(夏目,1997)。しかしテレビドラマやファッション誌、広告が既にボディイメージの研究領域で対象となっているのに対して(Stice, 1994; Tiggemann, 1996; Cusumano, 1997; Field, 1999, Becker, 2002; Sypeck, 2004)、マンガやアニメーションがボディイメージに及ぼし得る影響に関する研究は未だわずかしか(Klein, 2005)行われていない。

我々は、マンガにおいて見られる若い女性の体形は、何らかのステレオタイプや、マンガ家と読者の間の約束事を意味付けしており、そこからマンガ文化に特有のボディイメージが構成されていると考えた。今回の研究では、日本のマンガにおける若い女性の体形の描かれ方について、次の3つの観点から調査を行った。1) ジャンル別の女性の体形の特徴 2) 物語上の役割や人物の性格が体形に及ぼす影響 3) マンガ家の性別とジャンルの関係。

この研究結果は、現代日本の文化が若い女性のボディイメージに与える影響を考察する上で有用と思われる。

## 方 法

日本国内の主要な書店で入手可能な、広範囲に出版されているコミック誌に掲載されている作品を調査対象とした。我々はコミック誌を、少年向け、成人男性向け、少女向け、成人女性向けの4つのカテ

ゴリーに分類し、同様にそれらに掲載されているマンガを分類した。マンガ家の性別は、そのペンネーム、各誌の巻末に掲載されているマンガ家の短いエッセイ、その他の経路から得られた情報等を併せて判別した。マンガに描かれている個々の若い女性の身体像を、人間工学的に計測した。データの分散を適切な範囲に留めるため、幼児的な体形の誇張が著しい(例: 2~3頭身程の登場人物)いわゆるギャグマンガや、性的な誇張が著しい(例: 頭部より大きな乳房、大腿より細いウェスト)ポルノグラフィックは、計測対象から除外した。調査した全てのコミック誌、作品数、計測が行われた若い女性の身体像の数を、表1に示す。

表1 作品ジャンル別の、コミック誌、測定可能な若年女性の姿、作者および雑誌一冊あたりの平均作品の総数

カテゴリー	コミック誌	若年女性の身体像	マンガ家	一冊あたりの作品
少年誌	6	116	66	11.0
成人男性誌	11	123	81	7.6
少女誌	13	239	142	11.0
成人女性誌	10	195	94	9.7

マンガに描かれた身体像の人間工学的な計測は、今回の研究では全身像に比較したウェストおよびヒップの幅に焦点を合わせた。現実的な女性の身体像との比較を行うため、我々は、人間工学的な使用を前提として作成されたJISセンターのデータベース(河内, 2000)を利用した。このデータベースは、およその年齢区分ごとに無作為抽出された、各区分それぞれ100例以上の現代日本人(1997-1998)の人間工学的な体形のデータをまとめたものである。

ここから計算された平均値を基に、現実的な現代の若い女性の標準体形のシルエットを作成した(図1, a)。ウエストとヒップに関しては、データベースから得られた実際のばらつきを基に、平均値から1標準偏差(SD)ずつ変形させた体形のシルエットを、平均の-4SDから+4SDまでの範囲で作成した。この際、ウエストとヒップは独立に変形させた。すなわち、単純に細い体形(図1, b)や太い体形の他に、例えば非現実的な"特別グラマー体形"(例:図1, c: ウエストが-3SDでヒップが+1SD)や"ボールのような体形"(例:図1, d: ウェ

ストが+4SDでヒップが平均値)を作成した。シルエットのバストと大腿はヒップに応じて調節した。その他の部分の形態は、平均的なままに保った。このように、全身像を変えずにウエストとヒップ(およびバスト)を変形する手法は、コンピュータ・グラフィックスを用いた手法(Harari, 2001)同様、かつて多くのボディイメージ研究で行われていた引き伸ばしあるいは圧縮による変形法(Traub, 1964; Franzen, 1988)と異なり、四肢や顔の変形による不自然さが生じないため、胴体部分の太さや形のイメージを評価する上で適切と考えた。マンガに描かれる女性像はこれらのシルエットと比較され、そのウエストとヒップは平均的体形からの標準偏差を1単位として測定された。

マンガに登場する若年女性の物語上の役割や性格を、以下の10項目に関して評価した: "重要性"、"成功"、"善良"、"カッコよさ"、"女性性"、"母性"、"優しさ"、"強さ"、"依存性"、そして"破壊性"。これらの評価項目は、+1(その特性を有する)、0(その特性を有しない)、-1(正反対の特性を有する)の三段階で評価した。例外として、"重要性"に関しては、+2(その物語のヒロイン)、+1(物語の中で中程度に重要)、0(重要ではない)という形で評価した。

マンガの登場人物の体形や役割、性格は、10名の若年女性によって評価された。彼女らはいずれも身体的にも精神的にも健康であり、食行動や体重への関心に大きな問題はない者たちであった。彼女らによる評価は、現代日本の健康な若年女性の視点を代表しているものであり、老若男女全体の総合的な視点と比べると偏りが生じている可能性は否定できない。しかしながら、本研究の目的はマンガの若年女性の身体像が実際の日本人若年女性にどのような影響を与えているか調べるものであるため、その"偏りの可能性"は、むしろ今回の研究の目的に添ったものであると考えた。

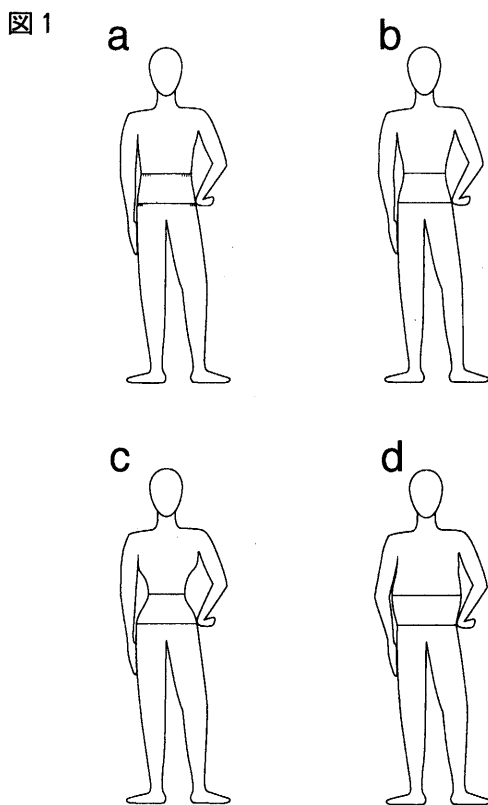


図1  
a: JIS センターのデータベースから作成した平均的現代若年女性の身体像。ウエストとヒップについては、実際のばらつきを基に1標準偏差(SD)ずつ4SDまで目盛りを付けて示してある。  
b: ウエストとヒップ共に2SD細い体形。  
c: ウエストが3SD細くヒップが1SD太い体形。  
d: ウエストが4SD太くヒップが平均の体形。

マンガのジャンルごとのウェストおよびヒップのデータは、一元配置分散分析にて有意な群間差が存在することを確認した後、個々の群間差をBonferroniの post-hoc test で検定した。役割や性格と体形の関連については、登場人物の役割、性格の10個の因子を独立変数、ウェストとヒップを従属変数として、重回帰分析を行った。マンガのジャンルとマンガ家の性別の関係を調べるには、カイ二乗検定を行った。

## 結 果

図2に示す如く、マンガに描かれた若年女性の体形は、全てのジャンル（少年誌、少女誌、成人男性誌、成人女性誌）において、現実の体形よりもウェ

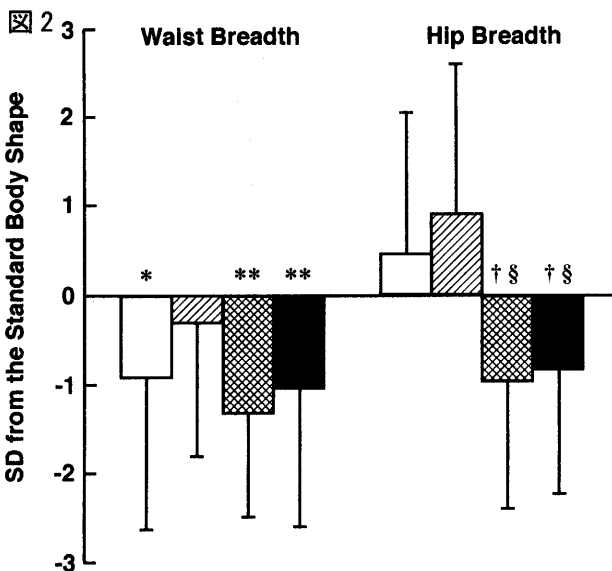


図2 マンガに描かれた若年女性のジャンル別のウェストとヒップの幅。縦軸は日本人若年女性の体形における標準偏差を1として標準体形からの偏移を示している。白は少年マンガ、斜線は成人男性マンガ、二重斜線は少女マンガ、黒は成人女性マンガで、それぞれ平均値と標準偏差を示す。\*  $P < 0.05$ ; \*\*  $P < 0.01$  は成人男性マンガのウェスト幅と比べた場合の有意差を示す。†  $P < 0.01$  は少年マンガのヒップ幅と比べた場合の有意差を示す。§  $P < 0.01$  は成人男性マンガのヒップ幅と比べた場合の有意差を示す。

ストが細かった。また、成人男性誌に描かれた若年女性のウェストに比べ、少年誌、少女誌、成人女性誌に描かれた若年女性のウェストは有意に細かった。一方で若年女性のヒップは、少年誌および成人男性誌で現実の体形より大きいのに比べ、少女誌および成人女性誌では小さく描かれていた。少年誌および成人男性誌と少女誌および成人女性誌のヒップ幅には有意な差があった。他の表現を用いると、少年誌および成人男性誌では若年女性は実際よりグラマーに - 細いウェストと大きなヒップ - 描かれる傾向があるのに対して、少女誌および成人女性誌では、ウェストもヒップも単に細く描かれる傾向があった。

マンガに描かれた若年女性の体形のステレオタイプを示すものとして、体形と物語中の役割や性格の関係を解析した。多変量線形回帰モデルから、有用と推定される独立変数をステップワイズ方式で広めに抽出 ( $P < 0.2$ ) し、表2に示した。推定モデルとしては十分とは言い難いものであるが、ここに残った独立変数のうち、帰無仮説の確立が0.05未満のものについて、マンガに描かれる若年女性の身体像を決定する上で関与する可能性の高い因子であると推定した。少年マンガにおいては、“優しさ”は太めのウェストで表現され、また“母性”、“女性性”、“カッコ良さ”は大きめのヒップで表現されていた。成人男性マンガにおいては、“母性”は太めのウェストで表現される一方、“カッコ良さ”、“成功”は細めのウェストで表現されていた。“優しさ”は大きめのヒップで表現されていた。少女マンガにおいては、“母性”が細いウェストで表現され、“成功”が小さなヒップで表現されていた。成人女性マンガでは、“依存性”が太いウェスト、“成功”が細いウェストで表現されていた。ヒップに関しては、線形モデルの妥当性が低いものの ( $F$  値 = 1.58)、“優しさ”が大きなヒップに描かれていると言えた。なお、全ジャンルにおいて、役割の“重要性”は体形に全く関与しなかった。少年および成人男性マンガの作者のほとんどは男

性であり、少女および成人女性マンガの作者のほとんどは女性であった（表3）。作者の性別不明という例は稀であったため、これらを省いて作者の男女比をカイ二乗検定で比較した。カイ値は282.7（自

由度3）で、帰無仮説の可能性は0.001未満であり、対象とする読者の性別により作者の性別が偏っていることが示された。

表2 登場人物の役割や性格の10因子を独立変数、ウェストとヒップを従属変数として行ったステップワイズ重回帰分析

ジャンル		ウェスト				独立変数	ヒップ			
		係数 $\beta$ (SE)	t	P	F		係数 $\beta$ (SE)	t	P	F
少年誌	優しさ	0.76 (0.34)	2.26	0.026	5.09	母性	1.42 (0.45)	3.17	0.002	3.72
						女性性	0.51 (0.23)	2.23	0.027	
						カッコよさ	0.87 (0.39)	2.20	0.030	
						優しさ	-0.54 (0.31)	-1.73	0.086	
						依存性	0.67 (0.40)	1.67	0.098	
成人男性誌	母性	1.26 (0.36)	3.54	0.001	6.92	優しさ	1.08 (0.39)	2.76	0.007	3.33
	カッコよさ	-0.73 (0.27)	-2.65	0.009		女性性	0.45 (0.24)	1.86	0.065	
	成功	-0.71 (0.32)	-2.21	0.029		強さ	0.70 (0.38)	1.85	0.067	
	破壊性	-0.75 (0.50)	-1.52	0.131	カッコよさ	0.64 (0.36)	1.78	0.078		
					善良	-0.51 (0.36)	-1.42	0.158		
少女誌	母性	-0.90 (0.41)	-2.18	0.030	3.28	成功	-0.63 (0.25)	-2.53	0.012	3.49
	依存性	-0.28 (0.19)	-1.48	0.140		優しさ	0.28 (0.18)	1.57	0.118	
	女性性	-0.25 (0.17)	-1.45	0.147		破壊性	0.65 (0.45)	1.36	0.176	
成人女性誌	依存性	1.03 (0.37)	2.83	0.005	4.41	優しさ	0.40 (0.20)	1.98	0.049	1.58
	成功	-0.60 (0.25)	-2.37	0.019		強さ	-0.42 (0.29)	-1.43	0.155	
	優しさ	0.40 (0.21)	1.93	0.055		破壊性	0.78 (0.55)	1.42	0.156	
	カッコよさ	-0.53 (0.30)	-1.73	0.085		女性性	-0.32 (0.23)	-1.39	0.167	
	女性性	-0.41 (0.24)	-1.71	0.089		カッコよさ	0.39 (0.30)	1.32	0.190	

表3 ジャンル別のマンガ家の性別

	男性	女性	性別不明
少年誌	59	7	0
成人男性誌	64	8	9
少女誌	4	131	7
成人女性誌	2	92	0

Pearson のカイ二乗値 (自由度 6) 298.2

"性別不明"の列を省略した場合:

Pearson のカイ二乗値 (自由度 3) 282.7

Fisher の直接検定法  $P < 0.001$

## 考察

人々の共感や憧れを引き起こす画像に繰り返し暴露されることは、それがやせた体形である場合、やせ理想像として内在化されることが、ボディイメージ形成の機序とされている (Richins, 1991; Posavac, 1998)。マンガによって示される「標準的」若年女性の姿も、同様に読者のボディイメージに影響を与え得る。少女マンガおよび成人女性マンガに登場する若年女性の平均的身体像は、実際の日本人若年女性の母集団よりも1 SD 細かった。すなわち、実際の若年女性でマンガの平均的画像よりやせている人の割合を推定すると、20%に満たないということである。マンガで非現実的なやせた身体像が登場するのは専ら少女マンガおよび成人女性マンガであった。少年マンガや成人男性マンガでは、グラマーな体形が別の意味で若年女性の理想像として描かれていた。ただし、現実の標準体形と比べた場合、男性誌における体形の偏移の方が、女性誌における偏移より少なく、より現実的であった。女性は一般的にメディアで示されるやせ理想像 - 別名「やせ新興宗教 (Cult of Thinness)」(Hess-Biber, 1997) - に対して、男性よりも犠牲になりやすいと言われている。我々の研究からは、やせ理想像が男性用メディアよりも女性用メディア (この場合はマ

ンガ) に多く出現していることが、女性が犠牲になりやすい理由の一つとして推測される。

女性の役割や性格を体形に投影している際のステレオタイプは、マンガのジャンルにより異なっていた。幾つかは極めて非現実的なものだった。例えば、"女性性"および"母性"は共に少女マンガおよび成人女性マンガにおいてやせたイメージに結びつくものであった。しかし少女マンガにおいて認められた"母性"を細いウェストと結びつけている傾向は、自然な女性の身体のあり方と矛盾していた。また、"依存性"を成人女性マンガにおいて若年女性の太いウェストと結びつけているのは、別の奇妙なステレオタイプを示唆した。すなわち、女性の依存性は、ジェンダー論的な見方からすれば負の側面であろうと考えられるが、それが「やせ理想像」から見ても負の形態として表現されていた。こうした結果からは、女性の自立を重視する人々もまた「やせ理想像」のステレオタイプに捕われており、結果として体形に関する女性の苦悩を増悪させているとすら推測されてしまう。

少女および成人女性マンガに認められる「やせ理想像」は女性マンガ家により描かれており、少年および成人男性マンガでは男性マンガ家により「グラマー理想像」が描かれていた。このことだけを理由に、女性の自己肯定感を脅かす「やせ理想像」を、女性が自ら造り出していると断定するのは早計であろう。しかしながら、我々の結果は、若年女性の間で、仲間による体形やダイエットに関するプレッシャーやからかいが、食行動の異常や摂食障害の発症に大きな影響を有するとしている報告 (Field, 1999; Paxton, 1999; Stice, 2003) と共通している。すなわち、やせ願望は、体形の理想が問題となる時に、女性達の中でのプレッシャーや競争意識により、女性の心の中で増大すると思われる。

マンガの作品は、単純にマンガ家だけが作り出すのではない。大衆に広く受け入れられる作品はマン

ガの市場を席卷し、流行となり、長期に渡って愛読されるが、受け入れられない作品は速やかに消え去る。一方で大衆は、新しいマンガによって生み出された流行に影響される。また、かつて流行していた作品の影響下に、新しい作品が生み出される。マンガで描かれた身体像は、作者と、読者と、以前に存在した作品によって決まるのである。ただし、今回の研究は、マンガによって作られた「やせ理想像」の起源を前述の三者のいずれかに帰するものではない。この研究は、マンガがどのような文化的メッセージをどのような対象に向けて提供しているか、解明したものである。

幾つかの限界がこの研究には存在する。今回得られた結果は、現代の日本に当てはまるものである。すなわち、将来の流行や、非日本文化圏において将来「マンガ」として作られる作品の傾向については、それらが現在存在する作品群の影響を受けると推測されること他には、この結果を当てはめて考えることが妥当である根拠は無い。マンガの登場人物の性格に関する今回の評価は、粗いものであり、それがグループにより成されているとしても、主観的なものである。またマンガが喚起するボディイメージが、健康な女性群と、より影響を受けやすい女性群の間で、どのように異なるのかといった、臨床的に重要な点においても不明である。しかしこれらの限界にも関わらず、この研究は、マンガが若年女性のボディイメージにどのような影響を及ぼし得るか体系的に調査した初めての研究である。マンガの読まれる範囲の広さやその影響の深さゆえ、そこに描かれる身体像の文化的ステレオタイプやメッセージについては、マンガが読まれる世界中全ての地域において、理解されている必要があると考える。

なお、本稿は、2005 International Conference on Eating Disorders (国際摂食障害学会 2005.4.27~2005.4.30 Montreal) の Special Interest Group Meeting—Transcultural Session—

で口演した内容をまとめたものである。

#### 文献

Becker AE, Burwell RA, Gilman SE, Herzog DB, Hamburg P. Eating behaviors and attitudes following prolonged exposure to television among ethnic Fijian adolescent girls. *Br J Psychiatry* 2002;180:509-514.

Bruch H. *The golden cage: The enigma of anorexia nervosa*. New York: Basic Books; 1979. (岡部祥平、溝口純二訳: 思春期やせ症の謎—ゴールデンケージ)

Cusumano DL, Thompson JK. Body image and body shape ideals in magazines: Exposure, awareness, and internalization. *Sex Roles* 1997;37:701-721.

Field AE, Camargo CA, Taylor CB, Berkey CS, Colditz GA. Relation of peer and media influences to the development of purging behaviors among preadolescent and adolescent girls. *Arch Pediatr Adolesc Med* 1999;153:1184-1189.

Franzen U, Florin I, Schneider S, Meier M. Distorted body image in bulimic women. *J Psychosom Res*. 1988;32:445-450.

Gordon RA. Eating disorders East and West: A culture-bound syndrome unbound. In: Nasser M, Katzman MA, Gordon RA, eds. *Eating disorders and cultures in transition*. New York: Brunner-Routledge, 2001. p. 1-16.

Gravett P. *Manga: Sixty years of Japanese comics*. London: Laurence King Publishing; 2004.

Harari D, Furst M, Kyrtyati N, Caspi A, Davidson M. A computer-based method for the assessment of body-image distortions in anorexia-nervosa patients. *IEEE T Inf Technol B*. 2001;5:311-319.

Hess-Biber S. *Am I thin enough yet? The cult of thinness and the commercialization of identity*. New York: Oxford University Press; 1997. (宇田川拓雄訳: 誰が摂食障害をつくるのか? 女性の身体イメージとからだビジネス)

香山リカ リカちゃんコンプレックス 東京: 太田出版; 1991.

Klein H, Shiffman KS. Thin is "In" and stout is "Out": What animated cartoons tell viewers about body weight. *Eat Weight Disord* 2005;10:107-116.

- 河内まき子, 持丸正明, 岩澤洋, 三谷誠二. 日本人体寸法データベース 1997 - 98. 東京: 通商産業省工業技術院くらしとJISセンター; 2000.
- 呉智英. 現代マンガの全体像. 東京: 情報センター出版局; 1986.
- Lee S, Lee AM. Disordered eating in three communities in China: A comparative study of high school students in Hong Kong, Shenzhen, and rural Hunan. *Int J Eat Disord* 1999;27:312-316.
- 夏目房之助. マンガはなぜ面白いのか. 東京: 日本放送出版協会; 1997.
- 夏目房之助. Japan's Manga Culture. *The Japan Foundation Newsletter* 2000;27(3):1-6.
- Paxton SJ, Schutz HK, Wertheim EH, Muir SL. Friendship clique and peer influences on body image concerns, dietary restraint, extreme weight-loss behaviors, and binge eating in adolescent girls. *J Abnormal Psych* 1999;108:255-266.
- Posavac HD, Posavac SS, Posavac EJ. Exposure to media images of female attractiveness and concern with body weight among young women. *Sex Roles* 1998;38:187-201.
- Powell MR, Hendricks B. Body schema, gender, and other correlates in nonclinical populations. *Genet Soc Gen Psychol Monogr* 1999;125:333-412.
- Prince R. The concept of culture-bound syndromes: Anorexia nervosa and brain fag. *Soc Sci Med* 1985;21:197-203.
- Richins ML. Social comparison and the idealized images of advertising. *J Consumer Res* 1991;18:71-83.
- Slade PD, Russell GF. Awareness of body dimensions in anorexia nervosa: Cross-sectional and longitudinal studies. *Psychol Med* 1973;3:188-199.
- Stice E, Schupak-Neuberg E, Shaw HE, Stein RI. Relation of media exposure to eating disorder symptomatology: An examination of mediating mechanisms. *J Abnormal Psych* 1994;103:836-840.
- Stice E, Maxfield J, Wells T. Adverse effects of social pressure to be thin on young women: An experimental investigation of the effects of "fat talk". *Int J Eat Disord* 2003;34:108-117.
- Sypeck MF, Gray JJ, Ahrens AH. No longer just a pretty face: Fashion magazines' depictions of ideal female beauty from 1959 to 1999. *Int J Eat Disord* 2004;36:342-347.
- 竹内オサム. 戦後マンガ50年史. 東京: 筑摩書房; 1995.
- Tiggemann M, Pickering AS. Role of television in adolescent women's body dissatisfaction and drive for thinness. *Int J Eat Disord* 1996;20:199-203.
- Traub AC, Orbach J. Psychophysical studies of body image I: The adjustable body-distorting mirror. *Arc Gen Psych* 1964;53-66.
- Wiseman CV, Gray JJ, Mosimann JE, Ahrens AH. Cultural expectations of thinness in women: An update. *Int J Eat Disord* 1992;11:85-89.
-